

ジャパン・スポットライト 2019年3/4月号掲載（2019年3月10日発行）（通巻224号）

英文掲載号 <https://www.jef.or.jp/jspotlight/backnumber/detail/224/>

ジェームズ・ホアー（James E. Hoare）氏（元英国外務省）

コラム名：Perspectives on Global Risks: the 2nd JEF Global Risk Symposium 4

（日本語仮訳版）

## 北朝鮮：その神話と現実

### はじめに：北朝鮮の専門家は珍しい鳥だ！

最初に注意を喚起しておきたい。1994年から2011年まで北朝鮮のリーダーだったキム・ジョン・イルは、2000年に韓国から来たジャーナリストの一団に、北朝鮮の専門家として振舞うものは誰でも愚か者だと告げた。1970年代の中ごろから北朝鮮を研究し、数回そこを訪れ、また2001年から2002年にかけての十八か月の間そこで暮らしたものとして、私は彼に賛成したい。物事がどのように動いているのかが明らかになったように思える、まさにその時に、全く新しい展開がそのバランスから我々を引き離し、昨日確実であったことが拭い去られてしまうのだ。これは私だけではない。将来の政策とかこの国の生存の可能性とかについての多くの予測が結局は間違いであったことがわかることが大量にあるのだ。北朝鮮はその訪問者に自分が見せたいところだけを見せるようにするのに長けている。このことを避けることは不可能ではない。しかし、そうするためには自分の目と耳を開けておかねばならない。額面どおり物事を受け取ってはいけない。出来るだけ自分自身で調べるが、決して無礼でルールを破ってはならない。大抵の国で何の問題にもならないことが、北朝鮮では寛容を以って受け入れられないかもしれない。このことは今までもコストとして認識されてきたことなのだ。

### 「悪者扱い」することは簡単だ

北朝鮮を悪者として扱うことは簡単なことだ。多くのコメンテーターにとって、そうすることは職務怠慢だ。この国を分析することも理解しようとするつもりもない。邪悪で、政策が間違っていると決め付ける。このような見解の最も著名な唱道者が、多分ジョージ・ブッシュ大統領と彼の上級幹部達だった。彼らが悪とは交渉しない、破壊するのだと言っていたのは有名なことだ。彼らにとって不幸なことに北朝鮮の核問題の現実と向き合う必要性は交渉を行うことへの消極性より強いことが判明した。しかし、ブッシュと彼の部下だけがこのような感情にとりつかれているわけではなかった。北朝鮮もまた、強い感情を露にし、この感情の強さがソーシャルメディアや伝統的なメディア、そして研究者の世界においてすら、辛らつな意見のやり取りとなって流れ出てくることもありうる。微妙なニュアンスが消え、白か黒かだけが支配する。

このようなプロセスは早くから始まっている。北朝鮮の正式の国家名である朝鮮民主主義共和国（the Democratic People's Republic of Korea）やその略称（DPRK）でさえ使用するものは殆どいない。この国が存在する権利はないのだから、正式名称を用いることによって正当性を与えたくないのだ。そのような見解を持つ者にとって朝鮮半島には国境があるべきではないのだ。朝鮮は 1000 年以上にわたって一つであり、分かれるべきではない。日本の植民地政府ですらそうすることは出来なかったのだ。歴史について殆ど何も知らない多くの人にとって、分断は北朝鮮のせいなのだ。

しかし、朝鮮半島におけるこの二つの別々の国の出現を見るに至ったプロセスは、実は朝鮮戦争勃発のはるか以前に始まっていたのだ。朝鮮半島の外の大国、アメリカとソ連が、最初の分裂を引き起こした。彼らの意図は、最初は日本の降伏を勝ち取ることに限定されていた。冷戦が勃発し、二つの大国は朝鮮半島における別々に分かれた国家の出現を構想した。南北朝鮮の指導者は統一を望んだ。両者ともお互いの存在する権利を否定した(ある程度、現在も未だそうである。両者の首脳会談があるにも関わらず)。挑発的な発言や脅しは両者から発せられた。北が先ず攻撃した。人口的には小さいが軍隊を与えるというソ連の決定のお蔭で、攻撃するための手段を有していた。アメリカは異なった決定を下した。韓国は北朝鮮の軍隊には匹敵できない軽軍備のスーパー警察隊を持った。もし外部からの介入がなければ、朝鮮の統一問題は 1950 年に解決されていただろう。しかしながら、介入が起こり戦争は何も解決しなかった。そして、二つのより大きな敵意すら持つ国が分断線を挟んで向き合うことになった。彼らの敵意は苦い戦争の味によって最初の時よりもっと悪化していた。

二つの朝鮮の関係は世界の他の国から助けられることはなかった。戦争の間、国連は 1948 年の「韓国が朝鮮半島における唯一の法的に認められた国家である」という国連宣言に従い、「朝鮮の再生と再統一」をもたらすと表明した「国連朝鮮委員会」を設置している。宣言の文言は、韓国政府が朝鮮半島における唯一の政府とは言っていないが、そのような意味を持つかのように機能し、そしてそれが西側諸国共通の立場となった。1970 年代の初めに、朝鮮戦争以来初の二つの朝鮮の間の実質的な交流と国連朝鮮委員会の終了ということになるまでは、この立場は変化せず、そして西側諸国も北朝鮮と外交関係を開くことはなかった。

戦争以来ずっと、北朝鮮の外では、二つの朝鮮についての略称は、南が「Korea」であり、北が「North Korea」であった。その意味するところは、明らかに南が真の朝鮮ということだった（似たようなことは分裂したドイツとベトナムにも起こっている）。「北」(North)というのは略称としては奇妙だ。もちろん、北朝鮮がこのイメージを作るのにいくつかの意味で貢献したことは間違いない。彼らの政府は独立の維持のために残忍なことも厭わない強い全体主義体制だったのだ。北朝鮮を訪れた人は、あまりいない社会主義国家の間においてさえ難しい同盟国と見られていた。北朝鮮は貪欲で貧しく、そして出来得る限り独自の道を歩んだのだった。

## 奇妙な場所

北朝鮮は、脅威と考えられてきたが、また風変わりで奇妙な場所であった。この二つの点は続いている。その軍備についての誇張された主張はたくさん存在するかもしれない。北朝鮮のレトリックは実に猛々しい。しかし、実際は用心深く、圧倒的な装備を持つ大国に囲まれた多くの小国のように振る舞う。世界平和に対する脅威だと疑われる場合でなければ、大部分の報道レポートはこの国の奇妙な性格としてみることで占められている。近年、このようなテーマには、北朝鮮は一角獣を信じているとか、リーダーの髪型の珍しさに注目したものとかを含むようになった。一方で、2016年7月には英国の新聞デイリーメールが、キム・ジョン・ウンはスイスのチーズや時計の愛好者なので贅沢品への国際的な制裁にショックを受けていると報じている。巨大ウサギ、ナマズ、そして奇妙なことをする風変わりなリーダー達の定期的なダイエットなどについて聞かされてきたが、その真偽は別として全てがごちゃ混ぜになっている。多くの人にとって、この国は人権（でも、いくつかのアフリカや中東諸国を見てほしい）から建築（大抵の旧ソ連の都市がこれに対抗しうるが）の分野に至るまで、世界で最悪の国である。



ピョンヤン 2018年9月（筆者撮影）



ピョンヤン 2001年8月当時（筆者撮影）

## しかし、それは消え去ることはない

変わらずに言われ続けていることは、北朝鮮はいつか崩壊する運命にあるということだ。これまでそういうことは起こらなかったという事実ですらこの予想を止めることは出来ない。世界の終わりが近いことを信じている者にとって、たとえ北朝鮮の崩壊が予想される期間の間に起らなかったとしても、次の時期にはあるいは次の次の時期には確実に起こるのだ。1949年に英国の内閣は、北朝鮮の軍が不満を抱いており国中に飢饉が広がりその体制は崩壊の危機に瀕しているというソウル公使館の報告に着目した。40年後、英国のコメンテーターのエイダン・フォスター＝カーターは、ソ連の崩壊の次に北朝鮮の崩壊が起こると書いた。2年以内ではないにしても、確実に5年以内には。実際にそうはならなかった時に、彼は更にそれから5年以内にはと言ったが、それ以降予測をやめた。

実際北朝鮮は、戦争、侵入、世界で最も長期にわたる制裁体制、その主たる貿易相手国の経済的崩壊と終末、飢饉、洪水、旱魃などにも関わらず生き延びてきた。ソビエトの軍隊は1945年に朝鮮半島の北の部分解放した。ソ連は共産党軍にこの地域を制圧させることが出来たかもしれない。そして明らかに北朝鮮の建国において主要な役割を果たしたかもしれない。北朝鮮の地位を維持するためにソビエトの武力に依存するということは、1949年までに終了していた。朝鮮戦争の間に北朝鮮を救ったのは中国であってソ連ではなかった。東欧の諸国と異なり、1950年代以降北朝鮮はより自立的な地位に移行し、国としての正当性を与えられるために、朝鮮全体の歴史的な過去と日本の植民地政府の行った政策さえ利用するようになった。ソ連の崩壊は東欧の共産主義を崩壊させたが、それは北朝鮮を心配させはしたが欧州諸国への影響と同じ影響は及ぼさなかった。

### 統一？

北朝鮮にとっての問題の複雑さは、1989～1990年の東独のそれと似ている。ソ連のリーダーであるミハイル・ゴルバチョフが、ソ連はもはや共産党の支配を支持しないことを明らかにしたとたんに、ハンガリーやポーランドのような国は恐れもなく政府の体制を変えることが出来た。しかしながら、東独は1945年まで統一ドイツの一部であった。その国民は、ラジオ、テレビ、そして直接の交流を通じて西独に接していた。多くの者が統一ドイツに戻ることを望んだ。第二次世界大戦でドイツと戦った国には、統一ドイツが強力に成りすぎることを心配して反対する向きもあった。この心配は克服され、二つのドイツは一つになった。しかし、東西の分断は続いている。彼らが二つの朝鮮のように戦うことはなかったが、彼らの間の分裂は大きくなり、克服しがたいものとなった。東独の人口は西独より小さい。その経済はかつての旧ソビエト経済圏の中で最強と広く考えられているが、非常に遅れたものである。その産業は西側諸国に比べて旧態然としている。分野によっては確かに東側の方が進んでいた。社会保障と健康保険は東ドイツの方がより平等に分配されていた。それは、支払い能力よりその必要性に基づいていた。二つのドイツの関係にはもう一つの問題があった。西側が支配した結果、東側に対する疑惑が東独の体制のために働いた人々に多くの失業をもたらした。国の政策を実行したがゆえに、裁判にかけられ刑に処せられた者もいる。

このこと全てが北朝鮮に共鳴する。支配階級は、東独、リビアそしてイラクで何が起こったかを知っている。このグループの何人かは、韓国からの和解ではなくて復讐を求める声があることをよく知っている。良く見ても、高い地位の指導者はその地位と職を失うことになることを予測する。最悪の場合、処刑されたり投獄されたりするという見通しもある。彼らがシステムとリーダーに忠実であり続けるのはこの結果を阻止するためであって、キムが時々プレゼントするブランディーのボトルや、スポーツカーのためではない。古いことわざを引用するなら、一心同体かさもなければ別々に死ぬだけなのだ。

たとえ最悪のことが起こったとしても、北朝鮮の指導者は何年もの間、南には北に対する半植民地感情があることを明確に指摘してきた。このことは、イ・ミョン・バクとパク・ク

ネ政権の期間においては極めて明白であった。韓国では、企業と政府は北を処女地ではないにしろ、収奪の対象として見てきた。南は現存の資源を開発することを助けることで、文字が読めて従順な労働力を搾取することを期待していた。このことは良い前兆ではない。多くの方は、北から南に来た人が非政治的な階層からにせよ、あるいはエリート層からにせよ、適応することが如何に難しいかを知ることになるのだ。

南においてもまた、統一についての疑いがある。1989年に戻って、南は東欧が変革を遂げたのでこの統一の考え方への熱狂が短期間燃え上がるのを見ることになった。しかしながら、それは多くの疑いが忍び寄るまでに長いことはかからなかった。1970年代初頭以来の経済発展の利益を刈り取り始めたばかりの時に、多くの方は北を整理するのに支払わなければならないものとして冷たい目を向けた。1990年代の飢饉は状況を悪化させた。北が楽園ではないことは明らかとなった。多くの成果として強調された業績は過去のものとなった。実際、分厚い雑誌のページ以外には存在しなかったように。ドイツにおける再統一のコストは、誰が想像したよりも高いものとなった。



ピョンヤンのポスター（筆者撮影）



ケソン 2001年秋（筆者撮影）

## 夢ではなく現実との格闘

統一は予想しうる限りの将来には有り得ない。おそらく、ある日、朝鮮戦争の年月を経験した者が全て亡くなり、そして両サイドがお互いについてもっと良く知り合えるようになる時にそれは可能かもしれない。しかし、それには長い道のりがかかる。従って、北は現在のあるがままのものとして対応する以外に選択肢はない。そうやってほしいという願望によるのではなく。

北からの脅威についての過熱した議論から逃れるなら、それが一つの助けとなる。誰も北が近隣諸国にとって困った存在であることを否定はしない。しかし、南以外の国にとってそれは脅威にはならない。韓国にとってすら、2019年は1949年ではない。国力の均衡は多くの点で南へ移行している。核兵器を保有していても真の優位性にはならない。半島におけるこのような兵器の使用は大きな報復だけでなく北そのものを揺るがすことになりうるのだ。

米国への真の脅威となることはないように思えるし、ヨーロッパにとっては更にありえない。米国のウィリアム・ペリー元国防長官は、かつて北と米国の間にある大きな相違について指摘した。もし、北朝鮮がその小さな核兵器を米国に対して使おうとするなら、確実にその体制の終わり、おそらくは国全体の崩壊を意味するような反撃に直面することになる。これは、ドナルド・トランプ大統領の復讐に燃えた炎と怒りとなって現れるだろう。北朝鮮は瀬戸際戦略を実行するとは言っているが、自殺的な戦略を取るとは言っていない。

そう、キム・ジョン・ウンは、脅しをかけ、戦争的な場面を演出してきた。休戦協定は拒否され、戦争宣言が定期的に飛び回った。しかし、何事も起こっていない。北朝鮮は依然として休戦協定を尊重している。今まで数多くの戦争行為に繋がる事態の進展についての言及がなされてきたが、それらを真剣には考えにくい。制御室にいるキムはコンピューターのプラグが入り電話が繋がっているとより真剣に見える。壁にかかっている地図が、その主張するところのアメリカに対する攻撃ロケットの進路というより、爆破する航空機の空路地図のように疑われなかったとしても。忘れられていることは、このような写真は主として内部用であり、統制し北朝鮮の敵に対して立ち上がっているリーダーに見せるためにデザインされたものであるということだ。

## 彼らを信用することは出来ない！

北朝鮮が条約とか協定に固執しないことは今や良く知られている真理だ。彼らは確かに強い交渉者だ。他の東アジア諸国と同様に、彼らは大抵正確な条文よりも文書の一般的な精神を大事にする。しかしながら、もしより正確になることで有利になるなら、彼らはそうするだろう。交渉者たちが期待するのは、均等で相互的なメリットがあることだ。もしそこに撤回や相互性の欠如があるなら、それは北朝鮮にとって交渉条件を充たさないことに対する口実を与えることになる。実際にそれは、1994年の枠組み協定で起こったことだ。北朝鮮はそのプルトニウムを基本とする核のプログラムを制約し停止して以来、協定を遵守し

てきたと信じていた。それは全て協定でカバーされていることだった。アメリカが協定に伴う責任を履行していないように思われたとき、2002年までにはその進行が8年遅れていると判定されたのだが、ジョージ・ブッシュ政権が敵意を示し始める一方、北朝鮮はその元々の目標に向けて異なった道を取り始めた。もし、ブッシュ政権が望んだなら、ビル・クリントン政権がそうしたように、枠組み協定の条件の下で静かに心配を指摘するに止めたであろう。しかし、「邪悪を退治する」ことに熱心のあまり、ブッシュ政権は別の道を選んだ。それは今日我々がいる状況に至る道を開いたという意味で賢い選択ではなかった。しかし、教訓は得られなかった。そして協定は、新しい条件を加えるか、現在の条件を変えるかという望みのために、破綻し続けた。

英国は、マイナーではあるがより成功した経験を持っていた。2012年12月に調印された外交関係を樹立する文書の中に、はっきりと、他のどこでもそうであるように、コミュニケーションの確保を許容されるということが謳われていた。私がピョンヤンに赴きこの点を注意喚起したとき、私は北朝鮮の法律はこれを許可しないと聞かされた。我々は電話やファックスによるコミュニケーションは持ちうるが、どの大使館もあるいは国際機関もインターネットへのアクセスは出来なかった。この国中をそのスタッフが飛び回っている国際連合世界食糧計画は、特にコミュニケーションの改善を希望したが、常に断られた。

我々の場合はこう着状態が1年間続いた。私は定期的にこの問題を取り上げ、ロンドンを訪れる北朝鮮の役人もまた同じメッセージの砲撃を受けた。私のピョンヤンの任期の終わりが近づくとつれて、私は別のやり方を試みようと思った。どうせそのまま引退するので失うものは何もなかった。そこで、ある晩私のアパートに北朝鮮の役人が夕食にやって来たとき、私は彼ら欧州部に、私はロンドンに、かつてのように働けないのであれば大使館を持つという考えは放棄するように提言するかもしれないというリスクを彼らが犯していることを指摘した。いつもの反対が述べられたが、おそらく偶然だろうが、1週間後、私はパーティーで呼び止められ、我々自身のコミュニケーション手段を持ちうると告げられた。このことを権威づける文書が翌日到着した。そのようなことが起こったので、予算が過大に使われ、私がそこにいる間は何の変化も無かったが、私の後任者たちは他の大使館や国際機関と同様の便宜を受けることとなった。そして、元の協定に立ち返ろうという試みはいっさい無かった。

### 何がなされるべきか？

1945年以来多くの年月、北朝鮮は良く見て不恰好な困り者ないし、悪く見て問題の潜在的な源泉と見られてきた。そこに変化を起こそうという希望を持ってそれに関わるより、北朝鮮を扱うやり方は孤立させることだった。今日の我々の置かれている状況に鑑みて、特に韓国と米国が異なった道を選んだ1998年から2002年までの短い期間に起こったことを考慮すると、この政策は失敗だったと論ずるのは難しい。そう、お金はかかったが、真の実績があったのだ。核開発プログラムは制限された。韓国は米国と他の多くの国同様、隣国と新

しい関係を築き始めた。日本すら便益を受け始めた。誰もが望んだこと全てを改善された関係から得たわけではなかったが、それはプロセスの始まりだった。もし、モメンタムが維持されたのなら、それがどこに行き着いたかどうかを知るものがあるだろうか。2018年の進展、それは2017年の脅しとまた報復の脅しからの脱却だったが、一筋の希望のきらめきを与えてくれた。制裁からの脱却は、貿易や他の関係の進展同様、普通の北朝鮮の人々を潤すことになろう。北朝鮮を孤立させる代わりに、制裁を実行に移す取組みの中には、他国ではどのように物事が行われるかを見る訓練と機会を提供することでより良く活用されようものがあるだろう。キム・ジョン・ウンは、対立から脱却することに利益を見出した。おそらく、我々もそれに努力を積み上げるべきなのだ。

ジェームズ・ホアー氏は日本史の博士号を取得し、1969年に英国外務省に入省しリサーチ部門に配属される。ソウル、北京、ピョンヤンに駐在。現在は執筆、番組にも出演している。

(了)